



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	8.ぴあのわ参加報告：「第9回ぴあのわ」から得たもの
Author(s)	金, 民業
Relation	北海道大学ピアサポート活動報告書（平成28年度版）p. 54-56
Issue Date	2017-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65092
Type	report
File Information	08HokudaiPeerSupport_H28.pdf



8. ぴあのお参加報告

—「第9回ぴあのおわ」¹から得たもの—

金 民業²

1. 分科会の議論内容とまとめ

筆者が参加した分科会は、「知名度・広報活動の向上」というテーマで、同様のテーマのグループに part1 と part2 の 2 グループに分かれた。筆者は part1 グループに参加し、メンバーそれぞれの実状における課題と改善点を中心に意見交換を行った。一日目は、グループ内のブレインストーミングを行い、可能な限り多くの意見を出し、似ている項目に分類した(図1、2参照)。二日目は、議論の総まとめと各グループの発表が行われた(図3、4参照)。以下、議論の内容について述べる。



図1 議論前のブレインストーミング



図2 広報活動の改善についての議論

第一に、サポーター個人あるいはピアサポート室レベルでの創意工夫である。サポーター個人のネットワークを活用してピアサポート室を周知したり、利用者の皆さんと交流す

¹「ぴあのおわ」は、2008年(第1回)から毎年全国のピアサポーターや学生支援関係者(20大学21団体で118名参加)が名古屋工業大学に集い、各大学の1年間の活動紹介や課題などの意見交換を行う合同研修会である。ピアサポーター活動が全国的に広がりつつある中、今後の活動を始めたい大学及び団体も参加している。具体的には、ピアサポーターの役割及び大学内の位置付け、相談活動における悩み、サポーター同士の支え合い、広報活動などサポート活動全般のテーマについて話し合っている。議論の形式としては、分科会、パネルディスカッション、ポスター発表など様々なかたちで行われている。開催期間は2016年2月27(土)～28(日)で、幹事校は追手門学園大学であった。また、会場は名古屋工業大学で、テーマは「新たなつながりを見つけよう」であった。

² 北海道大学教育学部4年

るため交換日記を書いたりすることがあった。また、SNS を利用して日々のピアサポート室のリアルな様子や活動をアップデートする意見もあった。さらに、ピアサポート室の敷居を低くするため、相談より「雑談」という言葉を使い、サポーターがより身近な存在であるのをアピールする声もあった。

第二に、大学内の支援機関と連携である。ピアサポート室開設間もない大学の場合、図書館やキャリアセンターなど大学内で知名度の高い施設と連携してイベントを企画する必要があるという。また、学生にピアサポート室の場所を知られていないという悩みを抱えている場合、新入生のオリエンテーションやオープンキャンパスなどの行事のお手伝いにサポーターが参加し、学生たちに PR することもあるという意見があった。

第三に、学生支援課の協力への呼びかけである。サポーターの活動について、大学側の理解・協力が得られにくい大学があった。該当するサポーターから、ピア室の存在の必要性、活動の不透明さ、人手不足によるイベントの企画の不許可などの課題が挙げられた。それに対して議論を行った結果、報告書の作成、学生支援課との定期的な情報共有などの対策案が出された。学生への広報活動だけでなく、学生支援課への広報活動も両立することが必要であるという意見が多かった。



図 3 part1 の発表



図 4 part2 の発表

2. 分科会から得たものと今後の課題

分科会を通して、筆者が最も大きな収穫だと思ったのは、各大学の実情を共有したことである。例えば、国立大学か否か、単科大学か否か、サポーターの人数及び経験による活動の幅、学生支援課の認識はどうかなど、それぞれの環境における課題はまちまちであった。そのため可能な限り、議論に入るまでグループのメンバーと各自の活動をより詳細に知る必要があるだろう。一日目の分科会でメンバーと足りなかったテーマについて話し合ったり、自分たちと同じ悩みを抱えている大学の関係者に声をかけて話を聞いたりして互いの理解を深めることが大事だと考える。

また、分科会で三つの観点から改善策があったが、グループのメンバーは SNS・利用者との日常会話・サポーターの個性を最も大事に捉えており、サポーターとして何ができるかを最も優先的に考えていた。みなが大学行事への参加、相談という硬いイメージの改善、利用者とのスポーツ交流のためのイベント企画など近くで利用者の実態をみている学生が目線でサポートできることを工夫している印象を受けた。実際の交流会においては、サポーター同士としての支え合い、職員とサポーター（学生）の垣根を超えた話し合い、次回の交流のための課題共有など夜の交流会まで話は尽きなかった。

ただ、サポーターがどのように動くべきかに話題が偏ってしまい、実際活動しているピア室の風景や利用者との間でのエピソードといった活動の実態に関しての話はあまりできていなかったのは課題である。「大学紹介」の短い時間では概要しか知ることができず、互いの活動がなかなかイメージしにくかったことも拭いきれない。なぜなら、グループディスカッションの中、そっちの大学では実現可能な案かもしれないが、うちでは厳しい」と話がなかなか進まないことが多々あったからである。更に一步踏み込み、自分たちの活動を写真や冊子などを持参し参加者の皆に紹介すべきであったが、そこまでできなかったことは心残りである。